剣盗りモノガタリ

松下星哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣盗りモノガタリ

【Ｎコード】
Ｎ１１２１Ｙ

【作者名】
松下星哉

【あらすじ】
とある国の一人の少年が様々な国を旅しながら妖魔やモンスター、剣の使い手等と闘い、色んな出会い、そして人として剣士として成長していく剣の物語。
バトル、ラブコメ要素ありな昔風の印象を与えつつ、実は未来の話。

第1話～序章～（前書き）

とりあえず、不慣れなので見づらいかもしれませんがご容赦下さい。

第1話～序章～

〈プロローグ〉

・・・その日、山向こうの夜空が煌めき、大気が震えた。
家の外では村人たちが何事かと、騒いでいた。今日は祭りで特に人出が多い。

「何だ、何だ今の音は」
「一瞬光ったぞ」
「何もこんな目出度い日に・・・」

俺、トウヤ・ヒノカは家の外から聞こえてくるそんな話し声を聞きながら、そっとため息を吐き、目の前の人物へ話しかけた。

「親父、外が何やら騒がしいが様子を見に行かなくていいのか？」

おれが自分の父親である目の前の人物、タチオ・ヒノカにそう言ったのには二つ理由がある。
一つは、俺の親父はこの村で村長に次ぎ二番目にお偉いさんだということ、もう一つは俺自身外に出たいということ。なのだが・・・
「心配は要らん。話し声を聞く限りでは、このあたりには被害もなさそうだし、余程大事になれば村長が出張ってくるだろう。それよりも今は儀式を終わらせるほうが先決だ。」

・・・これである。ちなみにこの儀式というのは、この村の古くからのしきたりで、１５歳になると元服（げんぷく）を迎えた、つまり一人前の大人として認めるために、様々な儀式、説明等が行われる。
まあ、それに伴い色々な権利、例えば剣を持てるようになったり村

の外へ出れるようになったり、だとか。ようやく旅に出れるなぁ・・・
・

「つまり、そのことを踏まえていれば、いざというときにも・・・
トウヤッ！聞いてるか！？」

「モ、モチロン」
聞いてませんでした。

「ふぅ。お前というやつは・・・まあ、いい。儀式は終わりだ。どうせお前のことだ、最後まで真面目に聞くとは思ってない。」

と親父殿は苦笑しながら、
「明日には旅立つんだろう？しばらく帰ってこんだろうから今日はせっかくの祭りだし楽しんでこい」

と話が分かることを言い出した。

「ああ、ありがとう親父。・・・父上。行ってきます。」
俺は立ち上がると、親父に一礼し、外へ飛び出した。

暦２５５年、７大陸から成る、とある国のとある村の一室より物語は始まる・・・話は１２年程前に遡る。

〈～暦２４３年～〉

空は澄み小鳥のさえずりが聞こえる、そんな爽やかな朝だった。そ

の空の下にある屋敷の庭先で・・・

「えいっ！やあっ！とうっ！」
朝の静寂を打ち破るように一人の少年がそんな気合いとともに木剣を振り回していた。軽くよろけながら。

「トウヤ、剣は力任せに降ってもダメだぞ。それに剣に振り回されすぎてるな」
と、たしなめる声が少年の傍から聞こえた。
それは、黒髪を短髪に揃え身の丈１８０？へ僅かに届かない筋肉隆々な青年だったが、その少年を見守る黒い瞳の眼差しはとても温かなものだった。

「むぅ。でも、このけんがおもたくてむずかしいよ、とうちゃん」
と、トウヤと呼ばれたこれも黒髪黒瞳の少年は口を尖らせて抗議する。

「はは、そうだな。トウヤの身体より剣のほうが大きいもんな。ただ剣を振るうのは力任せじゃ駄目なんだ。ちょっと貸してみろ。」
と、父ちゃんと呼ばれた青年タチオはトウヤと呼ばれた少年より剣を受けとる。そして、諭すような口調で、
「いいか、トウヤ。人には体内に流れるオーラってものがある。それを上手く操ることで力も速さも何倍にもすることができるんだ。」
と、タチオは木剣を受けとると同時に全身にオーラを纏いだした。
淡く身体が光りだし、剣先まで光りだした。

「よく見ておけ。これがオーラだ。このように自分の身体から手に

持った武器にまでオーラを行き渡らせることで破壊力や反応速度が数倍から数十倍に跳ねあがる」

と、おもむろに目の前にある大岩へ剣を振りかぶる。

ドゴン！

そんな音がし目の前の大岩が真っ二つに割れる。

「このようにオーラを纏った武器で斬ると木剣といえどかなりの破壊力になる」

と説明する。

「まあ、いきなりやれといっても無理だろうから徐々に覚えていけばいいさ。まあ今日はここまでにしとこう。汗を拭いとけよ。」

そういってタチオはトウヤの頭を軽く撫でて、家のほうへ踵を返した。

「おーら・・・？」

三歳の少年には言葉のみの説明が難しいと判断したのかは分からないが、実際みてもよく分からないといった風情の少年がそこに立ち尽くしていた。

第1話～序章～（後書き）

ご意見、ご感想あればよろしくお願い致します。

第2話～旅立ち～（前書き）

大筋みたいなものを書いてないので内容がわかりづらいかもしれません。
また、文章の拙さはご容赦下さい。

第2話～旅立ち～

〈暦２５５年〉
いざ、出発しようとして家の庭先で佇んでいたら、ふと修行を始めた頃の記憶が頭を掠めた。

「そういや、あの頃はまだ自分の本当の能力も知らなかったな」
軽く独りごちてみる。

「まあ、右も左もわからんようなガキだったからな。しょうがないか」

その時後ろのほう、つまり家の玄関から大きな声がした。

「トウヤー！元気でやれよー！魔物に気をつけてなー！」

親父も心配性だな

「分かってるってー、父さん！それじゃあ、行ってきまーす！」
俺も後ろを向き右手を挙げて大声で返す。

「さてと、行きますか」

こうして俺は生まれ育った村を出た。この先起こるであろう様々な出来事に胸を躍らせながら。

～村の外～
そして今、感覚的に村を出て３０分ぐらいもした頃だろうか、俺は何と言うか困惑していた。
というのも、

「聞いてるの？トウヤ？まずはこっちの海沿いよりも山道を通ったほうが隣の村にずっと近いのよ？」
と、話しかけくる奴が居るからだ。

「いや、だからな、俺が聞きたいのは隣の村への近道じゃなくて、何故お前が村を出て此処に居るかということなんだが・・・ネク」
するとそいつは何故か微かに目をそらしながら、
「だ、だから私も母様からちゃんと許可を取って村を出てきたって言ってるじゃない！」
と軽くキレながら言ってきた。
たしかにこいつ（ネク・カナワ♀）の母ちゃん（アオイ・カナワ♀）の大らかな性格なら、例え女の独り旅でも、大して気にせずに旅の許可をくれそうだが・・・ちなみにこのネクは、俺のお隣さん家の一人娘で、俺にとって所謂幼なじみってやつだ。しかも誕生日が二月ばかり俺より早い。そのせいかやたらと年上ぶってきやがるのがアレだが・・・はぁ・・・そんなことよりも、

「いや、俺が言いたいのはなんで俺が村を出た後にお前が後ろから追ってくるようなタイミングで現れたってことなんだが。お前はもう少し早く村を出ることができた筈だろう？」
と俺が言うと、こいつは言い訳がましく、
「い、いや私も自分の誕生日に村を出ようとしたのよ？ただ、色々と都合が合わなかったっていうか、気がのらなかったっていうか、・

・・独りじゃ不安だったっていうか・・・な、なによ！こんな美少女と一緒に旅ができるっていうのに何が不満なわけ！？」
と逆ギレしてきた。

不満っていうか、まあ確かにこいつの見てくれは身長１５５？程度で小柄だけど、腰まで伸ばした絹みたいなサラサラの黒髪に異常なぐらい白くて綺麗な肌、２年ぐらい前から急に大きくなりだした胸、にも関わらずやたらと細い腰、猫みたいな大きな黒い瞳と整った形の鼻や口、と傍から見たら間違いなく美少女の部類には入るんだろうが、いや入るのか？
まあ、人口５００人程度の村では同年代の子供は居らずいまいち基準がよく分からんが、そこは大して問題じゃない。
俺の自由気ままな独り旅計画が・・・
撒くか？いや、それでもしこいつが魔物や山賊とかに襲われたらさすがに寝覚めが悪いな。
はあ・・・
まあ、とりあえず隣の村までは一緒に行ってそれから考えてみるか。
規模が俺の村よりも５倍はあるって話だしな。

「分かった、分かった。一緒に行こうぜ。とりあえず隣の村まで。
口入屋で仕事も探す必要があるだろうし、宿屋も探す必要」

そこまで言って、異常な気配と聞いたことがない声が後ろから聞こえた。

振り替えるとそこには、顔が魚っぽく、体つきは人っぽい何かが立っていた。

第2話～旅立ち～（後書き）

ご意見、ご感想、等あればよろしくお願い致します。

第3話～遭遇～（前書き）

いまいち行の間隔がつかめないので、読みづらいかもしれませんが
ご容赦ください。

第3話～遭遇～

そいつは今まで見たこともないような姿をしていた。魚のような顔（といっても大きさは人の顔ぐらいあるが）、大人と同じぐらいの背丈（１６５～１７０?程度）、手足に生えた鱗と青っぽいというか、緑っぽいというか何とも表現し難いぬめっとした皮膚、明らかに人間ではなかった。

ネクが
「は、半魚人?」
と言う。

「半魚人?あれって魔物の部類に入るのか?確かに異形じゃあるが・・・」

そもそも、今の世でいうところの魔物の定義とは、
『人語を解さず人間へ害意を持つ異形の生物』とされている。つまり、こちらの言葉が通じずしかもこちらへ攻撃してきたり食料にしてこようとする生物が魔物というわけだ。
だから、ものは試しだと俺はそいつに話しかけてみる

「あー、えっとそこの奴、俺達に何か用か?」
と、俺が言うとその半魚人?らしき生物は目を大きく見開いた。

「オマエ、俺を見て驚かないのかっ！?」
何か言葉が通じた。

「い、いや、確かに見た目は人間じゃないけど、別に襲いかかってくるわけでもないしな。それよりも今お前が喋ったことに驚いたが・・・」

俺がそう言うと、半魚人は

「オレはこう見えてオレの一族では天才と呼ばれている。一族の中には、人語を喋れない奴も居るぞ？むしろ喋れない奴のほうが多いな」

流暢に返してきた

「そうか、天才の一言で片付けるのもどうかとおもうが・・・別に俺達を食おうとしたり襲いかかってくるわけじゃないんだな」

俺がそういう言うとそいつは憤慨して、

「人間が人間以外の生物に対して偏見を持っていることは長の話や人間の書物などで知っているが、勝手に決め付けるな！そもそも俺達魚民（よみん）は海藻や貝ぐらいしか食べない大人しい生物だ！」

「魚民っていうのか・・・まあ、お前の言いたいことは分かった。じゃあ、改めて聞くが俺達に何の用だ。まさか、ただ話しかけたかっただけか？」

そう言うと魚民は、

「それもある。この道を人間が通ることは珍しいからな。」

と言った。

するとネクが、

「そうか、ここはもう村の結界外になるのね。だからか・・・漁師の人達は普段は村付近の結界内で働いてるからね。」

ちなみに結界とは、かつて２５０年以上前に歴が始まった当初、この『火の大陸』を制覇した時の王スサノオが各地域を統治しやすくするために、結界技能を持った者、当時妖術師と呼ばれた者をかき集めて、当時存在していた集落毎に施していったもののことである。その結界の範囲を基準に現在の各村が作られていった。正式な呼び名は人口１００人以上の集落を村、人口１０００人以上の集落を町、人口１００００人以上の集落を街という。街規模になると、俺の村では見たこともないような珍しい物がある。何年か前に来た行商の持ってきた、あの甘い菓子・・・

「それで、本当に何の用なんだ？確かにもの珍しいとは思うが、この道に全然人が通らないというわけでもないだろう。なんでわざわざ俺達に？」
と俺が言うと魚民は、

「確かに、人間自体は何回か見たことはある。ただ俺の好奇心は並外れていてな、珍しい人間の番（つがい）が見れて思わず興奮して近づいてしまった。俺達魚民は成人して時期がくれば、卵を産み出して子孫を残すが、オマエら人間は雄と雌が交尾して子孫を残すのだろう？だから交尾が見れると思ってつい近づいたんだ」

といった。なるほど、つまりこの道は人が通ることもあるが俺達のように男と女が二人揃って通ったことはないと。それが珍しくてつい近寄ったと。納得だな。

すると横の奴が
「な、な、な、何を言ってんのよあんたっ！？つ、つがいっ！？こ、こ、こ、こうびっ！？な、なんであたしとこいつが番でこ、こ、交尾しなくちゃいけないわけっ！？交尾するにしても、こ、こっちだって、段階とか準備とかそれなりに雰囲気とか必要なんだからねっ！？」

「うん、落ち着け。微妙に論点がずれてるぞ。あー、それと魚民？。俺達は別に番でもなんでもないぞ。ただの知り合いの男と女ってだけで、別にお前が期待することはなんにもないぞ。」

そう言うと魚民は、
「そ、そうなのか。珍しいものが見れると思ったのだが・・・まあ、初めて人間と話せただけでもよしとしよう。」

と納得した感じだった。

「まあ、俺も珍しい奴と喋れてよかったよ。それと偏見は改めるわ。悪かったな。旅の途中だから、俺達はもう行くぞ。縁があったらまた会おうぜ。」

俺はそう言うと手を振って魚民に別れを告げ、踵を返して歩き始めた。

「・・・ただの知り合い・・・そうよね、そんなものよね・・・」

横でネクが小声で何かボソッと言ったようだが、俺にはよく聞こえなかった。

第3話～遭遇～（後書き）

大まかな設定は纏まっているのですが、それを文章にするのが難しいです・・・

第４話～魔物～（前書き）

やたらと説明くさい話になりました・・・

第４話～魔物～

俺の村は名前をカリュウ村といい、場所はこの火の大陸の最南端に位置する。
その名産品といえば、海に近いという地の利を活かして収穫の多い海産物が真っ先に挙げられる。
他の地域に行商に持って行く主な商品としては、一番近い村でも、大人の足で歩いて片道に最低３日は掛かるためやはり日持ちのする魚貝類の干物等が多くなるのは、まあしょうがない。
隣村は海から遠いためそれらは毎回完売するらしい。
他には、農作物やら織物やらが主力商品とは言わないまでも、安定した供給を行えるので、隣村には固定客がついているらしい。
そんな感じで物についてはそれなりに他の地域と上手く取引をしていると村の行商人達は言っていた。

物以外でカリュウ村の有名なモノと言えば二つありその１つには剣術が挙げられる。
それは、ここ数年でじわじわと有名になってきたという話だがそれには理由がある。
この大陸の首都であるカグツチという街で年一回開催される格闘大会でのここ数年の優勝者が、カリュウ村出身のヒノカ流剣術の使い手だということだ。
まあ、知り合いの姉ちゃんだが。
何でも華奢な見た目とは裏腹に鬼神の如き動きで物凄く強いことから人目を引き出身地や流派が他の大会参加者や観客から注目されたらしい。
優勝後、街にある城への士官の話、旅の用心棒、町や村等の警備、ついでに縁談が相当数本人へ舞い込んだらしいが全て蹴って今は街

で悠々自適に暮らしているとその人のお母さんは言っていたが。まあ余談だが。

もう1つの有名なこととは現在より何百年も前から、
『世界の7大陸にはそれぞれの大陸に一本ずつ、神剣(しんけん)が刺さっておりそれが大地や生物を活性化させ、生活を豊かにしている。それを引き抜き手にした者は人であれ鳥であれ魚であれ神と等しき力を得るだろう』

という確信めいた、冗談のような、『7神剣物語』（ななしんけんものがたり）、という話が言い回しや言語が違うにしてもどの大陸にも似たような話が伝えられているらしく、その話を基に、火の大陸初代覇王であるスサノオが大陸統治後に火の大陸の神剣を追い求めたという話が残っている。
結局見つかったという話はなく（どの大陸でも）、近年に、とある探索方法が見つかるまでは、神剣探索についてはずいぶんと下火になっていたが、その新しい探索方法により、神剣らしき場所に大体の見当がついたということで、現在街では神剣探索隊が編成されているらしい。
その探索方法とは単純な話で、「神剣がある場所に近づくほど魔物が活性化するのではないか」
という説をとある学者が以前に打ち出したらしく大陸中の測量と魔物の分布図を作成するため旅を10年程度し、最近漸く完成しそれを見当した結果、大陸の南側の方が明らかに魔物の質、量が高いということが判明したのだった。
だから、大陸の南側に神剣が刺さっている可能性が高いのではないか？との説が広まっていき、最南端にあるカリュウ村に何かしら神剣と関係があるのでは？という話が広まっていき、カリュウ村が大陸で有名になったのはまあ、大会優勝者の話と合わせ、偶々そんな

時期が重なった、のだと思うことにしよう。
まあ、何故急にそんな事を思ったかといえば・・・

「トウヤ！なにボーっとしてんのよっ！右に回りこまれてるわよ！」

とネクが叫んでいた。
というのも昨日魚民と別れ海沿いの道を進んだあと、山道に入った俺達は今、魔狼の群れに囲まれていた。魔狼とは、見た目は狼のような、だが狼の体長を倍ぐらいにした（ざっと見て３ｍぐらいか）、全身真っ黒な毛に覆われた、自分達以外の生物は餌ぐらいにしか考えていない魔物の呼び名であり、並の人間が戦えば大人２人でようやく一頭と渡り合えるといった程度の強さの生物である。そんなやつが俺達を取り囲んでいた・・・１０頭ぐらい。
いや、待て。数がおかしくないか。聞いた話では確かにこの生物の習性は数頭群れて獲物を襲うということだが、明らかに多いよな。
いくらこのへんが大陸の南とはいえ活性化しすぎじゃないか。そう思いつつ俺は右側に近づいてきた魔狼へ対して腰から抜いた剣を横に薙ぎ払い魔狼を胴から真っ二つきした。

「ギャウンッ！！」

そんな鳴き声と共にその魔狼は倒れた。

「グルルルルッ」
「ウーーー」
「ガオン！ガオン！」

その様子を見た他のやつが俺達を遠巻きにしながら吠えてきた。
今にも飛びかかってきそうな体勢で。

「さすがにあれだけの数に同時に襲いかかられたら不味いな」
俺がそう言うとネクが、
「あんた何言ってんの！？あんたが有無を言わさず切り捨てるから手持ちの食糧を蒔いてその隙に逃げようとしたあたしの作戦が台無しじゃない！」
と言ってきた。
「いや、そうは言うけどな？それは一頭二頭ぐらいなら何とか通じる作戦だろ？さすがにあの数には足りないと思うんだが・・・」
するとネクは
「じゃあ、どうするの！？行商の人が持ってる魔物避けもないし、逃げ切れそうにもないし、どうしようもないじゃない！？」
と焦った様子である。
「まあ、落ち着け。俺の強さは知ってるだろ？あの程度の数どうってことないさ。」
俺が言うとネクは、
「ま、まあトウヤが強いのは知ってるけど。あたしが言いたいのは剣でどうにかなる数？ってこと」
と言ってくる。
そこで俺は漸く合点した。こいつへは同じ剣術道場での剣技ぐらいしか見せたことがなかったっけ。
「違う。俺の本当の実力を見せてやるよ。・・・下がってろ」

俺はそう言うと愛剣の炎斬（えんざん）へと意識を集中させ始めた。すると・・・
「えっ？なにこれ、剣が光り始めた？」
ネクが言う。
「ああ、これが所謂オーラってやつだ。このオーラを利用することによって、剣と俺の体は何倍にも強化することができる。ただ昔見たけどニルナ姉もオーラを使ってたぞ？知らなかったか？」
そう言うと俺はオーラを纏った炎斬をネクへ見せる。ちなみにニルナとは三歳上のネクの姉貴で、実は大会優勝者その人である。
「ニルが？確かに昔から強かったけど・・・」
と若干腑に落ちない顔をする。
「まあ、いいや。さて行くぞ、魔狼どもっ！」
そう言いながら俺は魔狼の群れに飛び込み斬りかかった。
ズバッ！ザシュッ！バキッ！
「グオーッ！」
「ギャン！ギャン！」
「クゥーン・・・」
そんな鳴き声とともに魔狼は全頭地面に倒れ伏した。
「まあ、こんなもんだ。強いだろ？俺？」
俺がそう言うとネクは、微妙に納得してなさそうな顔で、

「オーラって何かズルい・・・」
と結構心外なことを言っていた。いや、別にズルくはないだろ・・・
俺は軽く嘆息し旅を再開した。

第４話～魔物～（後書き）

不快感がなければそれでいいです。ご意見ご感想あればお願いします。

第5話～温泉街～（前書き）

イメージ通り、には進まないものです・・・

第5話～温泉街～

魔狼の群れと遭遇後、もう二日ばかりかけて夕刻頃、漸く一番近い隣の町（イグナ）へとたどり着いた。
その町の入口にある門を見上げて、

「大きいな・・・」
俺がそう感嘆の声を洩らすと、
「大きいね・・・」
と、横のネクが似たようなことを言った。

「いや、カリュウ村にも似たような形の門はあったけど、大きさが違い過ぎるだろ？」

そう、カリュウ村の入口にも門があるが精々３ｍぐらいの高さしかなかったが、この村の門はどう見ても１０ｍはありそうだった。

「いやー、流石に村の規模が違うだけあるね。あそこが守衛所かな？」
そう言ってネクが向かって右にある小さい建物を指す。
「だろうな。えーっと、知らない村に入るには、身分証明書が要るんだよな。どこに仕舞ったっけ。」
俺は手持ちの頭陀袋に手を突っ込み身分証明書を探す

「あった。よし行くぞ。」と言って、入町の手続きをするため守衛所らしき建物に向かった。

～イグナ町～

町へ入る手続きを終えた俺達は、町中に入り目的の場所を探した。
我儘を言う横のやつのために。

「もーーーっ！宿屋は何処なの？イグナ名物の温泉宿屋はっ！！」

「おい、落ち着けよ。守衛所の人も言ってたろ？温泉街は町の外れにあるって。そう直ぐには着かねえよ。」
としょうがなしに俺は宥める。

ここイグナは源泉が湧き出るとかで温泉が名物の地域である。
湧き出る量も豊富なため、それを利用して何軒も温泉用の宿屋があるらしい。

それ目当てにこの町へやってくる人も多いらしく、宿屋も必然的に増えていき、それに伴い色んな商売、例えば料理屋、名産品店、飲み屋、賭博場、等々の建物も増えていったという話だ。まあ、町の外から来た人は、温泉に入った後は羽根を伸ばしたい気分になるのだろう。
また、地元の人も家でわざわざ薪や火を使って風呂を沸かすよりは経済的なのか、温泉には常に人が多いとのことだ。

「おっ！それっぽいところに来たんじゃないか？」
それから一時間弱も歩いたところで、雰囲気の変わった場所に出た。
妙に熱気があるな。

「キタキタキターーーッ」ネクがアホみたいに騒ぎだし、駆け出そうとした。

「待てっ！止まれっ！さっき聞いたお薦めの温泉宿屋を探すぞ！飯が安くて量が多く美味い、チヒロ屋って宿屋を！」

俺は慌てて声をかける。
これだけは外せるか。

「ええー。ご飯はどっちでもいいよ。それよりも湯船が広くて、美容に効く温泉がある宿屋を探すほうが・・・・・・うん、チヒロ屋を探そう！」

何故か俺のほうを見ながら焦ったネクがそう言い出した。
いや、別に腹が減って機嫌が悪いとかじゃないぞ。
本当は温泉はどっちでもよくて飯のためにここまで付き合ったのに、ふざけたことを言い出したネクを物凄い目付きで睨んだとかそんなことはないぞ。

「ああ、美味そうな匂いからして、多分あの正面にある大きめの建物だと思う。さっさと行こうぜ♪」

上機嫌になった俺はネクを促し、早足で先に行く。

「そ、そうね。早く行きましょう。」
（危ない、危ない。そういえばこいつはご飯の邪魔をすると物凄く機嫌が悪くなるんだった・・・それにしても匂いって・・・）
ネクはそう思った。

その時、右の料理屋らしき建物の扉が開き女の子が飛び出して来た。
「助けて！」
そう言いながら私の後ろに隠れた。
年の頃は私と同じか少し下ぐらいで、着物の上に白い前掛けをしていた。
続いてその扉から屈強そうな顔を赤くした男達が出てきた。３人ほど。

「おいおい姉ちゃんよ、逃げることねえだろ？ちょっとお酌してくれって言っただけじゃねえか」
真ん中の大柄な男が笑いながらそう言った。左右の二人も何が嬉しいのか笑っている。
「嘘です！無理矢理座らせて手とか、お、お尻とか触ってきました！」
その女の子が涙目になりながら私に訴えてきた。

「あれー？酒代にお姉ちゃんへのお触り代も含まれてるんじゃねえの？」
右側の太った小柄な男が
嬉しそうに言う。
左側の痩せてひょろっとした男が、
「まあ、いいじゃねえか姉ちゃん。戻ってこいよ。呑もうぜ？」
と笑いながら言う。

「う、うちはお料理屋でそういったことは一切してません！」
と女の子が必死になって言う。

「うるせえっ！こっちは代金払ってんだ！さっさと戻って相手しやがれっ！」
と真ん中の男が怒鳴りだした。

私は煩わしいと思いながら「あのー、この子も困ってるみたいなんで、あんまり無茶なことを言わないほうがいいんじゃないでしょうか？」
と遠慮がちに言ってみる。

すると、男達が顔を見合わせて笑いながらこちらへ、「お姉ちゃん別嬪だな。いいぜ、店を出るから俺達に付き合えよ？宿屋で一緒に呑もうぜ。」
と真ん中の男が私に言ってきた。宿屋？

「それは嫌です。あなたたちの相手をしている暇はありません。大人しく中で呑めないなら勝手に宿屋でもどこへでも行って下さい」

というと、何が嬉しいのか、
「おー、気の強い姉ちゃんだこと。まあ、いいから、いいから。」
と言って、酒臭い息を撒き散らしながら私の腕を掴んできた。その時、
「おい、ネク！何やってんだ！早く行くぞ？」
結構先まで歩いていたトウヤがこちらへ走って戻ってきて怪訝そうにした。
「誰だ？こいつら？」
トウヤが言うので、私は
「酔っぱらい」
簡潔に答えた。

「ふーん。おっさん、こいつは俺の連れなんでその手を離してもらえるか？」
と言うと、
「あーん？なんだてめえは？この姉ちゃんは俺達と一緒に呑むんだよ。すっこんでろ！」
と凄んでいた。だがトウヤは、
「いや、おっさん、聞こえなかったか？俺は手を離せって言ったんだが。それにそいつは今から俺と飯を食うんだよ。邪魔すんな！」
キレ気味に言った。
「こ、このガキィ！おいっ！このガキやっちまえ！」と後ろの二人

に言う。

「おいおい兄ちゃんよぉ。お前こそ人の楽しみを邪魔するとはどういうつもりだ？あぁん？」

「そうだぞ。そんな野暮なやつはこうだっ！」

とひょろっとした男がトウヤに殴りかかったが、トウヤはその腕をかわし、右拳を男の顔面に叩き込むと、もう一人の小柄な太ったほうのお腹を右足で蹴りとばした。

二人の男は悶絶した。一人は口から何か吐いていた。「ぐぅぅ」

「ぼぇぇぇっ！」

一連の動作はほぼ一瞬である。

そこに居る女の子と大柄な男はポカーンと呆けていた。

「て、てめえクソガキ！なにしやがる！」

と私の腕を離すと、大柄な男はトウヤへ向きあった。

「いや、なにって？殴りかかってきたんで、殴って蹴っただけだが？」

トウヤがキレ気味に言うと男は青ざめた顔で、

「て、てめえツラ覚えたからな！覚えてろよ！」

と言いながら後ずさり、二人の男を引き摺るように逃げて行った。

するとトウヤが呆れたように、

「なんだ、あれ・・・まあいいや。ネク！早く行くぞ！もう腹が減って腹が減って・・・」

と、踵を返して歩きだす。

「わかったわよ。さあ行きましょ。」

と私が言うと、

「待って下さい！」
そんな声がかかった。
女の子は、
「あ、あの、ありがとうございました！おかげでたすかりました。」
と律儀に礼を言ってきた。

「いいの、いいの。偶々通りかかっただけだから、気にしないで？」
と私が言うと、女の子は

「いいえ！そういう訳にはいきません！お礼をさせて下さい！あのー、もし良かったらご飯を食べて行かれませんか？もちろん代金は結構です」
女の子が私にそう言うと、それが聞こえたのかトウヤが振り返った。
目を輝かせながら。
これは絶対食いついてるわよね・・・温泉でお肌ツルツル計画が・・・

まあ色々な話が聞けるか、と思い直し
「わかった、有り難くご馳走になるわ」
と、女の子へ笑いかけながら言った。

第5話～温泉街～（後書き）

ご意見ご感想などあれば、お願いします。

第6話～仕事～（前書き）

内容をぶっちゃけると説明の回です。

第6話～仕事～

目の前にどんどんお皿が積まれていく。
確かにうちの店の料理は地元の人にも観光客にも評判が良く、イグナ温泉街一の料理屋と言われることもある。でも、いくらなんでもこの量は・・・

そんなことを思いながら、給仕の女の子はボーっと目の前の状況を見ていた。
目の前には、

「うん！これは美味いな♪イグナ地鶏だっけ？肉の歯応えも最高だし、甘辛い味付けも肉に合っててやたらと箸がすすむな！」

と、箸を休めることなく料理を片付けていく少年が居た。

「あ、あんた！少しは遠慮ってものをしなさいよ！もう何皿目なの、イグナ地鶏の丸焼き？ひー、ふー、みー、・・・もう１０皿いってるじゃない！」
と連れの少女が叫んでいた。

「えー？もうそんなに食ったか？美味すぎてついついおかわりしちまったよ。まあ、腹八分が健康にいいって話だし、このへんにしとくか！ごちそうさん！ありがとう、マーミ！」

と私、給仕の女の子ことマーミ・ナカヤに少年がお礼を言ってきた。

「い、いえ喜んでもらえて私も嬉しいです。それにしてもトウヤさ

ん、よく食べられるのですね？」
ちなみに私はイグナ地鶏の丸焼きは、一皿の三分の一ぐらいでお腹がはち切れそうになるのだが・・・

「そうか？何ならちょっと食い足りないぐらいだぞ？まあ、それだけ料理が美味かったってことだろ」
と、恐ろしいことを言った

「ま、まあこいつの食べ物にの量に関してはいつものことだから気にしないで？」
と、連れの少女ネクさんが言った。
さらに、
「何かごめんなさいね。大したこともしてないのにこんなにご馳走になって・・・」
と謝られた。

私は焦って、
「いえいえ、とんでもない！本当に助かりました。お礼ができて嬉しいです！あと、色々お話ができて楽しかったです！」
そう、お二人の出身地のカリュウ村の話や、女の子同士の話ができて、私はとても楽しかったのだ。年も私より一つだけ上なため、話も合ったし。

すると、厨房のほうから、「そうだぞ、姉ちゃん！
あいつらは、イグナでも有名な質の悪いゴロツキどもだ。丁度俺が出かけてた隙に店に来て、マーミにちょっかい出してやがったんだ！俺が居る時は全然そんなことしねぇのによ！」
と、この店の店主兼料理人兼私の父親、ガシュウ・ナカヤは言った。

（店主は見た目がいかついから、それを怖がっていつもはマーミに悪戯ができないんじゃないか）
俺は密かにそう思った。

（まあ、俺達も飯をご馳走になったから、結果的には良かった、と思うことにしよう）

俺達は食事のお礼をいって料理屋を後にした。

翌日、俺達は町の中心地である場所を探していた。
（昨日は結局、温泉宿屋には行かなかった。だって飯をご馳走になったしなぁ。俺の目的の九割は飯、残り一割が温泉だ。そのことについて連れは何か言いたそうだったが、めんどくさいので無視した。）

それで、今探している場所というのは口入屋（くちいれや）だ。
口入屋というのは、平たく言えば職業斡旋（あっせん）所で、日雇いの仕事から短期、中長期の仕事を紹介してもらう場所だ。
また、自分で仕事の依頼、人足（にんそく）の紹介を頼むこともできる。まあ、依頼料に加えて、口入屋への口利き料も必要なので、とりあえず今は関係ないが。えーっと、今の手持ちはと・・・795丸（がん）か。

もう、何日かは宿屋に泊まれるが、あんまり余裕はないな。
ちなみに、丸(がん)はこの大陸唯一の共通貨幣で、大陸の初代覇王スサノオが、大陸を探索中に見つけた、数百年程度経った朽ちかけた遺跡から、恐らく貨幣ではないかという数種類の丸い貨幣らしき物を基に作成されたとされている。
作成場所は、これもまた鋳造所らしき遺跡を手本として建てた首都の貨幣鋳造所しかなく、一目見て分かる見た目の緻密さと材質の稀少さからそこ以外では作るのは可能とされているため偽物は作れないはずだ。

材質は一番小さい物から、1丸、5丸、10丸、（銅製）
50丸、100丸、500丸（鉄製）1000丸、5000丸、（銀製）
10000丸（金製）

そして形は呼んで字の如く丸く、大きさは数値が大きくなるたびに一回りずつ大きくなっていく。
1丸(がん)は親指の先程度の直径だが、10000丸(がん)は手のひらぐらいの直径であり、しかも金製なので重い。
物価は、この町で料理屋での定食が一食50～60丸、宿屋に一泊すれば200～300丸といったところだ。
旅立つときに親父から1000丸ほど餞別にもらったが、このままでは宿屋に泊まれなくなってしまうので、こうして豊かな生活のために口入屋を探しているわけだが。

「ああ、あった。あれでしょ、この町の口入屋。やっぱりカリュウのより大きいね。」

とネクが左前方の建物を指していたので見ると
「ああ、あれだな。よし、入ってみよう」
俺は言いその建物に入った。

「いらっしゃいませっ！」
口入屋に入ると、正面の受付らしき木の机に座った２０代ぐらいの目もとのパッチリした髪の短い綺麗なお姉さんが笑顔で元気よく言った。
俺は、愛想よく笑いながら
「元気いいね、お姉さん？あんまりきつくなくて稼げる割りのいい仕事を探してるんだけど、何かいいのある？」
と常連っぽく言ってみた。するとお姉さんは怪訝そうに、
「えっと？お客さまは以前こちらをご利用されたことがありますか？」
と言うので、
「ないですっ！」
とこちらも元気よく言ってみた。するとお姉さんは若干顔を曇らせながら、
「あ、あのー。それなら初期登録を先にお願いします。
それと大変申し訳ないのですが、初期登録の方の場合は丙の下からの仕事しか受注ができないのですが・・・」
と本当に申し訳なさそうに言ってきた。するとネクが
「ごめんなさいお姉さん！このバカの言い方が悪くて。確かにこちらにお世話になったことはないんですが、別の村の口入屋で登録して何回か仕事をしてきてますんで初期登録は必要ないです。」

と横から言ってきた。
バカってお前・・・

「あ、あーそうなんですか。妙に慣れた感じがしたのはそのせいなんですね。では、登録証を見せて頂いてよろしいでしょうか。」

お姉さんが言うので俺とネクは其々の登録証をお姉さんに見せる。

「ほうほう、お二人はカリュウ村のご出身なのですね。お名前はトウヤ・ヒノカ様とネク・カナワ様。
えっ！トウヤ様は等級が乙の中なんですか！？ネク様も乙の下！。
ほうほう、登録証を見る限りお二人は今までにかなりの仕事をこなされてますね？」

何か軽く驚かれていた。
まあ、三年ぐらい前に登録して、色んな仕事をこなして来たからな、それなりの等級にもなるってもんだ。
ちなみに等級とは、下から丙の下、丙の中、丙の上乙の下、乙の中、乙の上、甲の下、甲の中、甲の上、甲の特上
と、十段階に区分されており当然上の等級になるほど難易度が上がってくる。等級を一つ上げるにはその等級の依頼を最低３つは成功させ、なおかつ口入屋の責任者の許可が要る。まあ、魔物退治とか最低限の強さは必要なので、そのへんを見極めるために不可欠な仕組みだとは思う。ネクが俺より等級が一段階低いのは倒せる実力があるのに見た目が可愛らしいという理由で兎（毛皮を採るため）を仕留めそこなったり、変な失敗を何回かしたせいだ。
大まかな仕事の内容といえば、丙の下などは草むしりとか家の掃除

とかで、大したことはないが、乙の下とかになってくると、魔物退治や獣を何頭か狩る、などと難易度がはね上がってくる。

俺は手っ取り早く稼ぎたいので

「ええ、まあ。数は多くこなしてきたんで、少々きついのでも期間が長いのでも大丈夫ですよ？」

と丁寧に言ってみる。

ちまちまやって報酬が安いのは嫌だしな。

横を見ると俺の言葉に賛同したのかネクもうんうんと頷いている。

お姉さんは少し思案して、

「うーん。そうですね。仕事に慣れてらっしゃるようですし、こちらなんかは如何でしょうか？お二人の希望に沿うことができるかと思われますが。」

と、受付机から一枚の紙を取り出した。

その紙には、

『鬼族（きぞく）の村、探索隊募集！

集え強者（つわもの）！

未知の種族を調べてみよう！

参加資格：乙の下以上の等級者十名程度

参加期間：最短１ヶ月

報酬：お一人最低３０００丸、但し成功報酬等は別途ご相談。

依頼人：アズト・ミタラ』

と書かれていた。

第7話～異変～（前書き）

別の人物視点にしてみました。

第7話～異変～

～首都カグツチ～

当代の第１６代スサノオ王の居城の一角のとある部屋では一人の男が手元の書類を見ながら馬鹿でかい声で怒鳴っていた。

「これはどういうことだ！何故警備兵の被害報告がこんなに多いのだっ！
警備の者は何をやっておる！他に被害は！」

この方はシバ・ウチカネと言い、『宰相』（さいしょう）という王を武力・経済共に補佐する立場にある、王に次いで地位の高い者である。
年の頃は６５ぐらいで、白髪で細く小柄な体格ながらも昔取った杵柄というか、武力官僚出身という経験に由来するのか、よく日に焼けたその皺の多い顔は険しくその怒鳴り声は時に王ですら怯ませることがあるというほどの厳しい御仁だ。
私も今より小さい頃はよく叱られたものだ。主に悪戯で・・・
その凄まじいまでの大声で怒鳴られながら、

「はっ！事に当たった警備部隊長からの報告によりますと１隊と２隊の警備部隊を総動員して、魔狼の群れを何とか倒し、街の結界内への侵入は防いだとのことですっ！」

と顔以外を全て保護できる鎧を身に付けた男が答えていた。
こちらの男は名をガロウ・サイハと言い、年は２３、高い背丈に引き締まった体格、黒い長髪を真ん中から無造作に分けた髪型、その下にある整った凛々しい顔立ちから、城内の給仕の女の子、首都内の女の子から大変な人気がある。
また、この若さで首都の警備部総隊長を務めるほどの武力の腕を持っていることもその人気に拍車をかけているのだろう。私はあんまり好きじゃないが。

その人気者がそう答えるとシバが、

「戯けっ！！街中への被害が出ないようにするのは警備隊として当然じゃっ！
儂が言いたいのは、何故たかだか魔狼の群れ１５頭程度に２部隊４８人のうち怪我人が１０人も出たかと言うことじゃっ！ましてやその内の重傷者が２名じゃとっ！
最近の警備兵は烏合の衆かっ！！！」

と、さらに怒鳴りつけていた。
すると、ガロウが若干気まずそうに、

「それに関しては面目次第もございません。
今後は今まで以上に訓練に励むように全部隊へ通達致しますっ！」

と答えた。
すると、シバは

「ふんっ！まったくっ！儂の若い頃の警備部は・・・・・・・」

と長々と説教し始めた。ガロウも可哀想に。

だが、と私は考える。
確かに魔狼はそれなりに手強い。手強いが警備部とは日頃から対魔物用の鍛練をしており、魔狼程度なら並みの警備兵１人でも２～３頭程度なら倒せる実力があるはずだ。それこそ１部隊２４人なら魔狼１５頭に対して余るぐらいの戦力だ。にも関わらず第１部隊のみならず第２部隊まで投入して、さらに怪我人まで出るとはどうも納得がいかない。
シバとて、そのへんの警備兵の実力などは把握しているはずなのに、頭に血が昇っているのか、その事には触れずに結果だけを見て説教している。どうもおかしい。そう思った私は説教がうざいということもあり、声をかけてみる。

「シバッ！説教はもうそのへんでいいんじゃない？
そんな昔話よりも今の問題は魔物が街近くまで侵入してくる現状をどうにかすることだと思うんだけど。警備兵の訓練にしたっていきなり強くなるものでもないしね。」

するとシバは

「確かにそうかもしれんがのぅ、姫。じゃが最近魔物に襲われることなく、弛んどった警備兵にも責任はあるじゃろう？なにより今の若いモンは実践経験が少なすぎる。
儂らの若い頃は今よりも危険な任務ばっかりじゃったぞ。」

姫と呼ばれた私は、

「でもねぇ。私もお父様と何回か警備兵の訓練見たことがあるけど、お父様も別に訓練内容に文句なさそうだったわよ。ねぇ、ガロウ？」

と横のガロウに話を振ってみる。

ちなみに私の名前はシエル・スサノオ、年は１５のうら若き乙女だ。父は現国王の第１６代スサノオで、一人っ子の私は第一王位継承者となる。

（まあ、婿を迎えればそいつが王にるのだが、私より弱いやつと結婚する気はさらさらない。

自分で言うのもなんだが私の容姿はそれほど悪くはない・・・と思う。

今は亡きお母様譲りの栗色の髪を短くまとめた髪型にそれなりに整っている・・・と思う顔、贅肉のない引き締まった体、あまり大きくない胸・・・

だから高官の息子とか親族が私を見て怯えるのは見た目の問題じゃなく小さい時から剣術の実験台でボコボコにしてきた結果だ・・・と思う・・・）

なので、今年元服を迎えた私は政務を覚えるために、宰相であるシバに付き合って、ここ執務室でガロウの報告を聞いていた。

「はっ！ありがとうございます姫！しかしシバ殿の言われる通り警備兵達にも弛んだ部分もあるかと思いますので、訓練は増やそうと思いますっ！」

と言うので私は、

「うん、それはそれでいいんじゃない？

それよりも私が言いたいのは何故精鋭の警備隊が魔狼相手にそこまで傷を負ったってことなんだけど。

シバ？報告書にそのへんの所見はある？」

するとシバは、

「まあ、実は儂も最初そう思った。いくらなんでもそこまで苦戦するとはのう。だが報告書には魔狼の数、出撃人数、襲撃してきた日ぐらいしか書いてないのぅ。何か追記はあるか、ガロウ？」

と言い、ガロウは

「はっ！自分は事後報告しか受けていないので実際にその魔狼を見てなく、各部隊長の言い訳かとも思うのですが・・・」

と歯切れ悪くなったので、私は

「いいから、どういう風に言われたの？」

と促すと、

「はい、報告の際に、第1第2部隊長が口を揃えて、「今まで戦ってきた魔狼よりも数倍強かったです！」と言っておりました。日付は報告書に書いてある通り4日前です。まあ、今まで魔物の襲撃を経験したことなく不意をうけたところもあるでしょうが・・・」

と言った。私は、

「ふーん。数倍強いねぇ。言い訳にしてもおかしいわね。でも、あの真面目な2人がそう言うなら、冗談とか言い訳でもなさそうだから、それこそ実際に強かったんでしょう？」

と言った。するとシバは別の報告書を見ながら、

「ふむ、偶々魔物が襲撃したのも４日前か・・・直接は関係ないとは思うが、４日前に大陸の南のほうで何か大きく光ったという報告も入っておるな・・・こちらは何が起こったか見当もつかんのう。」

と何かブツブツ言っていた

「シバ？光ったって何が？どこが光ったの？」

気になったので聞いてみると、シバは

「まあ、魔物の襲撃云々とは別の報告なんじゃが、大陸の南、イグナ町に治安の管理者として置いておる者からの報告でな、４日前の夜にある場所・・・これは島じゃな、島から大きな光が見られたという報告じゃ。ふーむ。」

と言うので、その話が気になった私は、

「とある島？どこなの、その場所は？」

と聞いてみるとシバは、

「ああ、結界外の場所じゃな。イグナの町から数１０？離れた場所にあって直接近くで見たわけではないらしいが、その方角にはその島ぐらいしかないのでおそらくその島に間違いないじゃろうという報告じゃ」

と言うが私は場所にいまいち見当がつかないので、

「ふーん？結界外なら人は住んでないんでしょ？何なのかしら、そ

の光？」

と疑問に思って言うと

「ああ、人は住んでおらんじゃろう。ただ大陸平定当初にスサノオ王が結界を張れなかったというその場所には、ある者達が住んでおるという話じゃよ。

儂も見たわけではないから詳しいことは言えんがのぅ。」

と言うので、私は

「結界が張れなかった？

ある者たち？どういうこと？」

と言うとシバは、

「ああ、結界はある強大な力を持った者たちに阻まれて張れなかったと、文献で見ただけじゃ。

２５５年前、当時大きな力をもった妖術師と呼ばれた者たちの力を持ってしても、それは叶わなかったらしい。

その時島に居たのが人語を解し、人の形に近い人在らざる異形の者、亜人（あじん）だったという話じゃ」

と言うので私は、

「えっ！？それってもしかしてお伽噺とかに出てくる鬼とか、妖精とか、あの？」

と言うとシバは、

「そうじゃ。まあ、若干種別が違う気もするが・・・ともあれ、魔

物と違いそれら亜人(あじん)などは滅多にお目にかかれんが当時の書かれた文献には絵入りで書かれておったよ」
とシバが言うので、私は興奮し、目を輝かせながら
「へえーっ！！亜人って実在したんだっ！！
すごいね！！
そこにはどんな亜人が住んでるの！？」
と言うと、シバはこう言った。
「その島のことは、こう書かれておったよ」
『鬼族(きぞく)の住まう島鬼ヶ島(おにがしま)』
と。

第8話～島～（前書き）

話があんまり進まないですが・・・

第8話～島～

「いやー、予定人数には少し足りませんでしたが、それでもこれだけの方々に参加いただけるとは思いませんでしたよ！」

ワハハハ！っと走行中の蒸気と帆を動力にした船の先頭に座っている男が上機嫌にそう言った。

名前をアズト・ミタラと言い、一昨日口入屋に言ったときに面白そうな仕事の依頼をしていた男だ。２０代後半ぐらいで意外と若い。

聞いた所によると商人兼探索屋で様々な場所で取引しつつ、未知の場所や財宝などを探しているらしい。

あのあと口入屋で受付のお姉さんに他の依頼書をいくつか見せてもらった俺たちは軽く相談し、最初に見せてもらったアズトの依頼を受けることにした（一つ依頼を受けると依頼を完遂するまで重複は不可なため相談した。）

資格も依頼条件に合ってたし、中々稼げそうだし、なにより鬼族（きぞく）っていう言葉にとても興味が沸いたからだ。

どんな姿をしてるか、とかどれだけ強いのか、とか。まあ、そもそも旅の目的が色んなものをみたり、強くなったりすることなんでそこは仕方がないと思う。

それにしても当初の予定より数が少ないらしいが、これで大丈夫か？とも思う。募集は１０人程度とは書いていたのに俺とネクとアズトを入れても９人しか居ないぞ？予定人数に足りなくていいのか？

まあ、依頼内容は調査ということらしいが。それとも、人数が揃うまで待ってられない何らかの事情があるのか？

と、アズトの言葉を聞いて参加者の中で一番年嵩の男が口を開いた。

「ふん、お主のその口ぶりだとよほど参加者の応募が少なかったとみえる。
報酬の嘉多は兎も角、内容はそれほど尻込みするほどのものではないと思ったがなあ？」

と他の参加者を見回しながらいう。
最初の自己紹介のときもこのおっさんは文句を言ってたな。この程度の依頼内容で人が集まるのが遅いだのなんだの。
たしかこのおっさんの名前は、レンジ・ミタノ、等級は甲の下だったか、見た目は色んな戦いを経験してきたみたいな傷がいくつかある顔に髭を無造作に伸ばした坊主頭、うちの親父ぐらい大柄な筋肉質の身体を鋼の大鎧に包んだ大体４０歳前後ぐらいか。
得物はそばに置いてある槍だろう。
と、おっさんの連れらしき男が慌てたように言った。

「い、いや、そうは言いますけどねレンジさん。僕たちみたいに依頼が始まってすぐに偶々口入屋さんに言った方は少ないんじゃないでしょうか。
それにレンジさんだって丁度運よく中期の仕事が見つかったって喜んでたじゃないですか？」

この男はおそらくレンジという男と今までに何回か一緒に仕事をしたことがあるのだろう。気安い感じで喋りかけている。
こちらの男は名前をリクオ・シクラと言い、レンジよりも５～６歳は年下に見える。見た目は短めの黒髪に浅黒い顔、多少小柄で引き締まった俊敏そうな身体に動きやすそうな革の鎧を見につけている。
確か俺と同じ乙の中の等級でこちらは得物が左右の腰に差した二刀か。

アズトが、
「いや、私も募集期間は長いかとは思ったんですよ。ただ、以前別口で似たような依頼をした時に募集期間を短くしすぎて人が集まらなかったので。
まあ、今回は募集期間をあまり長くしすぎても機を失なったら元も子もないので、早めに募集を打ち切りましたが・・・」
と尻すぼみに答える。

すると
「まあ、良かったんじゃないの？予定人数はほぼ集まったんでしょう？この子達は見た目以上に役にたちますよ？
それにこれだけ屈強そうな殿方たちが居るんだから充分だと思いますよ♪」

と同じ顔をした2人の少女に挟まれた妙に色っぽいお姉さんが言った。
このお姉さん名前はリシナ・トゴウと言い、年は２０代半ばぐらいで、見た目は肌の白いやたらと整った小さな顔に、色素が薄いのか茶色いさらさらの髪を肩まで伸ばしすらりと高く細い身体にでかい胸と尻を包む上が白く下が黒い羽織袴のような服で雰囲気がとにかく色っぽい。
等級は乙の上で得物はまあ見たまんま弓だろうな、あと手元の分厚い本も何なのか気になるが・・・
お姉さんの言葉を聞いた、傍らの右側の負けん気の強そうなほうの少女が

「そうよ！私たちが居るんだから何も心配しなくていいよ、ね！師匠！
おじさんもそんなにくよくよしないで大丈夫だよ！私たちが居るんだから！」

と、朗らかに答える。
二回言わなくても・・・
ちなみにこの少女は名前をアリナ・クロカゲと言う。ネクと妙に気が合って話してたみたいなんで年を聞いたら俺達の一つ下らしい。
見た目は黒髪をおかっぱにし程よく日に焼けた目元のパッチリした美少女と呼べる顔、ネクより僅かに低い背丈に細い身体にリシナさんと同じような羽織袴を着ている。身体の凹凸はリシナさんに比べると少ないもののそれなりに出るところが出ている。等級はネクと同じ乙の下で得物はリシナさんと同じ弓か。

「わたしはまだギリギリ２０代なのですが・・・おじさん・・・はぁ、頼りにさせていただきますよ、クロカゲさま。」

アズトが軽く落ち込んだように言う。
すると、リシナさんの傍らのもう一人の少女が
「・・・うん・・・がんばる・・・」

とボソっと言った。
こちらはアリナの双子の妹でユリナ・クロカゲという。見た目はアリナとほぼ一緒で等級も一緒だが見た感じ性格はアリナと比べて大人しそうだ。得物は・・・ないな。いや、腰に差した短刀か？それとリシナさんが持ってるような本と似たような本が手元にあるが？
あの本は・・・？

「ま、まあとにかくみなさんよろしくお願いしますよ！もうそろそろ島が見えてくると思いますので！」

と、アズトが大きな声で言った。

そのとき一番後ろに離れて座った男が口を開いた

「・・・漸く島か。漸く鬼と戦うことができるのか・・・」

その男は低い声でそう言った。

見た目は、頭から顔まで覆う兜を被っており、身体もすべて覆いかくすようなこの大陸に伝わる鎧とは意匠の異なる銀色に輝く鎧を身に付けている。

名前はミシル・タイナって言ったか。背丈は大柄でおそらくレンジより少し高いぐらいではないかと思う。兜を取ってないので顔と年はいまいちよくわからんが、声の感じからおそらくそんなに年はいってないと思う。２０代半ばから後半ってところか。

等級は乙の上で得物は背中に背負った大剣だろう。

それはともかくこいつは今鬼と戦うって言ったか？

確かに全員武装してるがそれはあくまで島に生息する獣とか魔物とかへの備えだろ？仮に鬼が居ても調査が前提の依頼でこいつは何故戦うことが前提なんだろう？

そんなことを考えているとネクが

「ねぇ、ホントに鬼族って居るのかな？」

と言ってきた。依頼を受けてからずっとこの調子である。楽しみにしすぎだろ、こいつ。

「多分な。会えるかどうか分からんが。
古い本で読んだことがあるが、かつて、それこそ２５０年前か？には実際に鬼を見たこともある人が居るらしい。その当時の記録はあるからな。
ただ気になるのは、その当時からかなり文明が発達して今みたいに大して時間もかからずに行ける距離なのに何故今まで誰も行っていないのか。行く価値すら無いと判断したのか？
いや、もしかしたら行った人も居るかもしれないが鬼族に会ったという記録もない。何故その記録がないのか？それが分からん」

と俺の話しを聞いていたのかアズトが、

「ええ、もちろんヒノカさまの言う通り過去にも何回か行ったという記録はありますよ。
ただ、それは海の途中で断念して引き返したりだとか、予算の都合上だとか、島内の地理が険しいとか、様々な理由があるらしいです。
それで結果としては悉く鬼族に会えなかったということです。
かつて鬼族に会えたのはスサノオ王率いる妖術師を含む優秀な調査団だけでスサノオ王や妖術師が居たから何らかの特殊な力を使って鬼族に会えたのでは、というのが今現在の最も有力な説です」

俺は、
「じゃあ、アズトさんは何故今回はこの計画を実行しようと思った？過去に何度も失敗してるなら今回も失敗の可能性が高いと思うが？スサノオ王も居ないし、妖術師も居ないのに」

疑問に思って聞いてみる。リシナさんが何か言いたそうにしたがアズトが、暫く何かを考えるようにして、
「そう思われるのはごもっともだと思います・・・・・・ここまできたら正直に白状します。実は今回の依頼に関しては政府が大元

の依頼者なのです。
そして依頼書には便宜上、鬼族の調査依頼と書きましたが、実際の目的は違うのです。」
と言うので俺は
「目的が違う？
じゃあ何のためにアズトさん、いや政府は結構な予算まで使ってこの依頼を行ったんだ？」
微妙に納得できないので聞いてみた。するとアズトは
「それは島に到着してから話そうと思っていましたが・・・いいでしょう。今からお話しします。隠すことでもないですしね。
実は今から約１週間前の夜に、これから行く鬼ヶ島で大きな光が観測されたそうなのです。一番近い町であるイグナの観測所から見られたので光った場所は鬼ヶ島に間違いないです。それに何か不吉なものを感じた政府つまり王ができる限りその光が何かを早く迅速に調査すべきだと判断し、イグナに拠点のある商人の私にイグナで人を募って調べろと私に命じたのです。
首都から調査隊が来るまでは時間がかかりますしね。何があるか居るのか分からないので本当はまだ人数が欲しかったのですが、そういった事情により募集の延期が不可能だったので、募集を希望人数以下で打ちきったのです。」
と教えてくれた。するとネクが、
「えっと、じゃあ鬼族に関しては何もしなくていいということですか？」
と尋ねた。するとアズトは

「いえいえ、そもそも島のどこが光ったか分からないため結局は島全体を調べてもらうことになります。その過程であわよくば鬼族に遭遇できたら何かしら結果を残したい交流をしてみたい、とは当初から考えています。最低期間の１ヶ月とは島を調べながら回るのにそのぐらいはかかるだろうとのことで設定しました。」

ネクが、
「わかりました。教えていただきありがとうございます。別にやることは変わらないようだし、何故急に鬼ヶ島へ行くのか理由がわかったのですっきりしました。」
と言う。アズトが、
「みなさま、そういう事情ですので、よろしくお願い致します。っと、見えてきました。あのうっすら見えるのが鬼ヶ島です！」
と進行方向を見ながら行った。感覚的にはあと２０～２５分ぐらいで着くだろうと俺は見当をつけた。
それから適当に雑談しながら１５分少したった頃、俺達が乗っている舟は鬼ヶ島まで数百ｍの距離まで近づいた。
アズトが、
「あと5分ぐらいで島に着きます！みなさん！準備はよろしいでしょうか！」
というので、参加者が各々返事をしたり身支度をし始めたりした。
「では、みなさま。島に着きましたらくれぐれもはぐれないように・・・」
と、アズトが注意事項を言おうとしたとき、

ドーーーーンッ！！！
という大きな音がし、それとほぼ同時に、舟のすぐ傍の海が大きな衝撃に襲われた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1121y/

剣盗りモノガタリ

2011年11月9日03時03分発行